

創立者の名誉学術称号授与式に同席して（2）

北 政 巳

過分な紹介をいただきましてありがとうございます。私は1971年、開学と共に西洋経済史科目担当の専任講師として、大阪大学大学院博士課程在籍のまま創価大学に赴任しました。若江先生はちょうど10歳上で、一番若い教授としてこられました。同じ学部でした。また奇遇なことに、今お話しされた神立先生も経済学部で、なおかつ私と同じ経済史、神立先生の指導教授の関順也教授が日本経済史で最初の経済学部長でした。実は、私自身の指導教授の和歌山大学の角山榮先生が京都大学の堀江保蔵教授の同門下という御縁でした。

今日はテーマをいただきましたので、そのテーマに即して話をさせていただきますが、一番最初に前史として言わなければならない前提があります。1964（昭和39）年6月30日に創立者池田先生が創価大学の設立構想を公表された時、ちょうど私が20歳で和歌山大学の3年生で初めて上京した会合でした。当初の構想では、創価大学の開学は1973年だったのです。先に東京の創価学園が1968年にスタートしていました。

ところが1968年頃から全国の大学、また世界でも学園紛争が起こります。その兆しが見えた時、創立者は、学園生がこんな紛争の学舎に行くのはかわいそうだと言われ、その意を受けて設立準備委員会が開学を2年早め、1971年としたと聞きました。

そのため、開学当初、さまざまな先生が集まってきました。そのため、『潮』2006年8月号に開学当初の創価大学のドラマが掲載されましたが、いろいろな出来事がありました。私などは大阪大学大学院の在籍のまま創価大学経済学部講師になりました。翌年、単位満期退学しました。教授会は講師以上が参加できましたが、多種多様な動機から創大に來られた先生方も多く、その中でもっとも若い血気盛んな教員だったわけです。だから開学当初の先生方の発言もほぼ明確に記憶しております。

神立先生が4期生ですが、私は1期生が卒業した後、創価大学から海外研修の機会をいただき1年間イギリスのグラスゴウ大学経済史講座にジュニア・リサーチ・フェローとして研究留学しました。スコットランド銀行史のテーマででした。帰ってきた後、もっと研究したいと願い、ブリティッシュ・カウンシルの留学試験を受け合格、1979年から1980年英国政府の招待を受け、再びグラスゴウ大学にシニア・リサーチ・フェローで留学します。

グラスゴウ大学を選んだのは1975年1月に国際会議でチェックランド教授が見え、紹介してい

Masami Kita（経済学部教授）

*本稿は創価大学創価教育研究所主催の講演会（2010年12月17日）の記録である。

いただいたからでした。また教授はスコットランド銀行史研究をされていました。1度目の留学で気づいたのは、グラスゴウ大学から幕末・明治に多くのスコットランド人の御雇い教師・技師たちが来たことでした。そこで2回目の留学の時にはブリティッシュ・カウンシルの招聘でしたが両国交流史を中心に研究しました。

例えば、東京大学の最初の校長がグラスゴウ大学卒業生の26歳のヘンリー・ダイアーであったことは知られていませんでした。驚かれるかもしれませんが、東京大学が創立百年史を出される時に、この情報が採用されました。交流史調査中には、グラスゴウ大学で見つけた留学生の留学前後の経歴を調べる必要があり、当時大学院生の神立・寺西先生にお世話になりました。むしろ何故、このような歴史事実が消されたかに問題がありますが、それは私の研究を読んでもいただければわかります。

帰国後は別科の留学生教育にしばらく関与しましたが、経済史・経営史学会の仕事が中心となります。1986年に国際部長になります。今回のメイン・テーマの国際部長としての活動の件ですが、まず御理解いただきたいのは、当時は未だ携帯電話もファックスも有りません。ビデオも携帯用はなく、8ミリと言われる映写機の時代でした。だから創立者の秘書から、信濃町にはテレックスがありましたから連絡を受けて、「いついつに北さん空港に出迎えてください」というような時代でした。

私が名誉博士号授与式の式典に立ち会ったのは1990年からです。創立者の7番目となるブエノスアイレス大学でした。創立者の北米平和旅に随行しました。その時にカリフォルニアから、御長男の池田博正理事が南米に行かれるので、当時の学長、大学事務局長と一緒にアルゼンチンまでついて行ったのを覚えています。

ところで、みなさん、名誉博士号とは世界の何処から始まったか御存じですか。イギリスのスコットランドのアバディーン大学が1850年代に、大学を卒業しなくとも立派になった人がいるというので定めた制度なのです。それが19世紀から20世紀にイギリスから世界に伝わった制度です。ドイツとフランスの大学では、現在でも名誉博士の制度はさほど普及していないのです。最近是国家元首には贈るようにしているようですが、しかし、イギリスの、私の専門とするスコットランドの大学制度が世界に流れていったのも不思議です。ちなみにアメリカや日本の大学は4年制ですが、これはスコットランド起源の制度で、イングランドでは3年制なのです。

さて本題に入りますが、アルゼンチンに随行して行った時の、面白いエピソードを一つ言いますと、式典前にブエノスアイレス大学でシュベロフ総長に会いました。カリフォルニアを出るときに、総長に渡してくださいと、創立者から本を預かりました。英語のトインビー対談でした。式典前にその総長にお渡ししようとしたのですが、断られたのです。びっくりしました。私は困惑しながら何故ですかと聞いたら、「実は私の家内が、去年クリスマスのプレゼントにこの本をくれました」というのです。どういう事ですかと聞くと、総長夫人が本屋に行って、「私の主人は学者だけれども、主人に勇気を与える本を薦めてくださいと言ったら、本屋の店員がこの本を選んでくれました」と。「だから私はこの本を持っている。家内からの本があるからいらぬ」というのです。ただ、それでは私が困るので受け取ってくださいとお願いし、創立者のご署名入りのト

インビー対談を渡すことができました。

私がある時にはっきりとわかったのは、創立者のご著作はすごいなということです。実際に会っていない世界の方までが読まれているのだと気がついたわけです。皆さんも、ブラジルの大学から名誉博士号が多いと思われませんか。それは日系人を中心に池田先生の平和・文化活動が評価されるのは、当然のことですが、同時にブラジルではトインビー博士がとても尊敬されているからです。ですから、ブラジル国ができた時、首都をどこにするかという時に、リオデジャネイロではなく、また日本人のたくさん住んでいるサンパウロでもなく、ブラジルはブラジリア市を作ったのです。これは、トインビー博士の思想である、「新しい国を新しい首都で」という考えを受け入れたのです。同じような国がもう一つあります。オーストラリアです。オーストラリアも、メルボルンとかシドニーがありますが、首都を作る時にキャンベルに決めました。それはトインビー博士の思想の中に、「新しい首都」という考え方があったからです。

その意味では、私たちは牧口先生、戸田先生、池田先生という3代の会長を通じて創価思想を理解しますが、意外と海外の方はトインビー博士、池田先生という風に理解しています。

当のトインビー博士ですけれども、私が英国に行った1975年、まだ生きておられました。私はロシアから到着された創立者に1975年5月にパリでお目にかかりました。その直後トインビー博士御見舞にロンドンへ来られた時に、私はサボイ・ホテルで激励を受けました。「どこの大学にいつているの」、「ロンドンからどれくらい」、「どれくらいメンバーはいるの」等を聞かれてお土産をいただいた後、「必ず、いつか訪問するから」と激励を下さいました。ホテルからトインビー博士の御見舞に行かれました。その時に1972年と73年の対談の特装本と、創価大学教授会から名誉教授称号を託されてトインビー博士の秘書を訪問されたそうです。後で聞いたのですが、博士は田舎のヨークで静養中だったそうです。そのあたりにも厳しいスケジュールをやりくりされ、対談された博士への深い敬意を払われたのがわかります。その日の午後にはヒースロー空港からパリへ戻り、識者との対談に臨まれました。私はロンドン在住の友人と共に、空港で見送りました。

実は、私はA. J. トインビー博士の英国内での評価に驚いたのです。つまりトインビー博士の叔父さんは、学者としては優れた方でしたが、イギリスで最初のマルクス主義者といわれ「産業革命」という言葉を初めて用いました。トインビー博士の両親が彼を尊敬して同名のアーノルドと命名しさらに祖父のジョセフからJとした話は有名です。

そのトインビー博士は名著『歴史の研究』を書かれたけれども、英国では孤高の学者で変人で有名だったのです。私は英国経済史界を代表されるグラスゴウ大学のチェックランド教授やマンロー博士に、池田先生がトインビー博士と会談されている話をしても、風変わりな研究者としてしか理解されていなかったのです。困惑したのを思い出しました。

ところが、先生との対談の通りに、東西冷戦が終わり「対話の時代」が到来しました。すると彼への評価も変わり、トインビーは、「20世紀イギリスを代表する著名で優秀な歴史学者」となったのです。つまりトインビー博士との対談は、池田先生が世界に理解されるために非常に大きな役割をしたことになったのですが、トインビー博士自身も、池田先生との対談により、風変わりな歴史家ではなく、偉大な歴史家として業績を残すことになったわけです。私は、トインビー博

士存命中の評価を聞いているだけに、驚きでした。

それから、もう一つ、アルゼンチンはラテンの国です。ラテン文化圏が面白いのは、親子関係の結びつきが強く、池田先生の名誉博士についても、御息子が代理受章されるのも当然とされます。ところが「契約社会」のイギリスでは、絶対に本人が行かないと授与しない制度になっています。それでも北アイルランドのクィーンズ大学は、後で触れますが、代表団が見えて創価大学で式典を行われました。これは英国主義がもう一步世界に視野を開いた特例と思います。

またメキシコのグアナファト大学は、ブラジルの帰途、当時の学長が代理受章されました。素晴らしい式典で、創価同窓の音楽家が、現地の大学オーケストラメンバーに本学の学生歌を教えて、演奏してくれたのを思い出します。海外で聞いた最初の学生歌でした。

マカオ大学の名誉教授の時も、随行しました。面白かったのは、数年後にマカオが中国へ返還される前でしたが、マカオ大学のランジェル総長がフェレーラ学長を連れて香港文化センターに見え、会見があり同席しました。するとフェレーラ学長は真っ青になってしまったのです。そこで心配して彼に聞きました。すると彼は「私は、20年以上も前にフランスのパスツール研究所で池田先生のトインビー対談の仏語本を見た。次に本国に帰って、ブラジルから発行されたトインビー対談のポルトガル語本を見た。そして今日、御本人から英語版をいただいた。一体、池田先生は何歳ですか」と。つまりトインビー対談の表紙は白黒写真で、双方の年齢が書かれてないのです。ですからフェレーラ先生はトインビーと同年くらいと思い込んでいたのです。そうすると池田先生の年は110歳くらいになるのですね。眼前のお元氣な創立者の姿を見て、本人は怖くて震え上がってしまった訳です。

実はヨーロッパの慣習として年は聞かないし書かないが、日本は年齢を常に公表するからわかるんだと思いました。事実、親子でも親の年齢を子どもに明かさないと聞いたことも思い出しました。

それから次がフィリピン大学の、これはアブエバ総長がやってくださった、非常に荘厳な式でした。アジアの名門大学からの最初の式典だったと思います。またトルコのアンカラ大学も良く覚えております。ケニアのナイロビ大学の名誉学位式典は一行を迎えての博学池田記念講堂での開催でした。

それからブラジルのリオデジャネイロ連邦大学、これは面白いですよ。なぜかというと、同大学の名誉博士号は、コミュニケーション学部の名誉博士号なのです。なぜ名誉博士号がコミュニケーション学部なのか。私の役目は、いろいろなところに出かけて行って情報を聞きます。すると、この大学の総長が非常に立派な方で、池田先生のSGI環境提言に非常に感動され、大学首脳や学部長たちを集めて、「今度創価大学創立者の池田先生にリオデジャネイロ連邦大学に来ていただくと思う、その際に名誉博士号を贈りたいのだが、希望学部はあるか」と聞かれたそうです。その時に5、6学部が立候補したそうです。その時にコミュニケーション学部の学部長が「うちの学部は小さく、認知度が弱い。池田博士は世界的なコミュニケーション活動を展開されています。だから、我が学部にしてください」と話し、名誉博士号はコミュニケーション学部に決まったそうです。私は、直接に、その学部長からこの話を聞きました。この方は、その後1度、創価

大学を訪問されました。

それから次の、アルゼンチンのローマス・デ・サモーラ大学とコルドバ大学などからの顕彰に同席しました。両大学ともブエノス・アイレス市内で式典を開催していただきました。

次にパラグアイのアスンシオン大学、これもよく覚えております。現在、創価大学の式典の中で、来賓に学生の気持として「創価友誼之証」が贈られますが、学生さんであれば知っていますね。実は、池田先生がアスンシオン大学の式典に臨んだ時に、同大学では学生の立場が強い。そこで学生自治会から宣揚したいとの声があがり、同大学学生代表からの賞を受けられた。その時に創立者は一言いわれました。「この賞には意義がある。創価大学も参考にすれば」と。調べていただくと分かりますが、その後、この賞が創価大学での学生伝統になったわけです。来賓にとっては学生から賞をいただくということは、ある意味では大学教授会からの賞よりも喜ばれることも理解できました。また創立者が、どこにあっても創価大学の学生のために道を拓かれていることも実感できました。

例えば本学の学生ホールの中2階部分にソファが置いてあります。あれもアメリカのハーバード大学での2度目の講演前に、少し時間が早く立ち寄られた隣の建物で、「これはいいね。参考になるね。こういうのを作ってあげたいね」と随行した学長に言われた一言が実現したものです。

ブラジルには連邦大学と州立大学とがありますが、先生はパラナ、リオデジャネイロ、ホンドニア、南マットグロッソ、アマゾナスと今日聖教新聞に受章が掲載されたマットグロッソと6つの名門連邦大学から名誉学位を受章されています。さらに中国では名誉教授称号の方が威厳があるとされますが、100を超える中国の大学から受けられています。

ボリビアのデル・バリーエ大学名誉学位式典は当時の学長が代理で受章した儀式でしたが、記憶に残る式典でした。その後、同大学一行がチリのエイルウィン元大統領一行と同じ日にみえたのを覚えています。その前に創立者がチリ訪問時に大統領宮殿で会見され同席しました。

次いで中国の深圳大学ですが、創立者は香港から陸路、深圳に入り名誉教授を同大学講堂で受けられました。私は蔡学長の言葉に感動しました。蔡先生に「池田先生が香港に来られると聞きました。深圳大学に寄ってもらおうと思うのですが関心はありますか」と聞きました。すると「池田先生を顕彰したい。是非とも来てください」と言われました。「それはなぜですか」と伺うと、「池田先生はもうすでに北京大学と復旦大学から名誉博士号を受けておられます。中国には5500の大学がありますが、北京と復旦の名誉教授称号をいただいた方なら、その方に貰っていただくことは、贈る大学の名誉なのです」と。続けて「池田先生が中日友好に尽くされた功績からして、池田先生が名誉教授を受けられるということは、むしろ本学にとって名誉なのです」と素直に喜ばれていました。私はその時に、なるほど、先生がよく言われていた「偉大な人には、偉大な人がわかるんだ」との言葉を思い出しました。

それから、アルゼンチンのパレルモ大学も思い出深い大学でした。この大学は、創価大学の池田記念講堂の大広間で式典を行った最初の大学です。この大学はもともとブエノスアイレス大学の教授だったポポフスキー教授の父が創立した私立大学です。そして創立者に同大学として第一号の名誉教授の話が届きました。

パレルモ大学は当時アルゼンチンの小さな私立大学でした。アルゼンチン、また南米の大学の特徴は、公立大学の先生の給与が低いとか、待遇が悪いとかで、頻繁にストライキをするのです。学生もすぐにストライキをします。ところが、有力者は自分たちの子息に大学を卒業後に外国に高等教育を受けに行かせます。まず自分たちの社会で指導者になるために絶対に自国の大学を出なければならぬのです。ところがストライキをやっていると単位が取れない。そのような事情から、パレルモ大学はアルゼンチンの私立大学ですが、急速に有名となり人材を集め、さらに国連の認定する大学になり、現在では中南米でトップの私大になっています。この例を踏襲して同じく成功しているのが、ボリビアの私立大学のデル・パーリエ大学です。創立者の顕賞が、それらの大学の宣揚となるドラマを見ました。

トルコのアンカラ大学のセリーン総長も思い出深いゲストでした。ドラマがありました。面白い会話を思い出します。例えば先ほど話したパレルモ大学のポポフスキー学長は、創立者に向かって、「先生の大学を訪問すると、廊下に素晴らしい写真がたくさんありますね」と聞きました。興味深い質問なので関心を持って聴いていると、創立者は「本当は美術品をと思ったが、学生が壊したら困るし、学生の自由な気持ちを尊重して、私が撮影した写真を掲げています」と答えられました。総長は感動し、「池田先生が学生さんに世界への目を開き雄飛してもらいたいと願われている気持ちのメッセージですね」と話しました。それから2年後のアルゼンチン訪問時に、当時の学長と私がパレルモ大学に表敬訪問しました。

その時にポポフスキー総長から「私は、池田先生との対話から発想を得て一つ学びました。大学の廊下に世界の名所旧跡ポスターを貼りました。すると学生さんが世界を意識できた喜んでくれたのです。私は感謝しています」とありました。私は、海外の識者が創立者の行動と振る舞いを我々以上に真摯に学び、尊敬されていることに感銘しました。

トルコのアンカラ大学のセリーン総長は、創価大学に来られ池田記念講堂を訪問して感動したのです。創価大学を訪問した理由も興味深いのです。実は大学20周年記念に池田講堂が建つときに、創立者の御提案で世界の諸大学に「大学講堂を造る際に世界平和と文化交流の殿堂の意義をこめて貴大学から石を、できたら由緒ある石を」と手紙を出していたのです。その手紙を受けとった一人セリーン総長は、その時から創価大学と創立者を意識していたそうです。

その後、創価大学を訪問し学術教育交流協定を結びました。それから2年後の創立者のトルコ訪問時に、トインビー対談のトルコ語訳が出版され、また同大学の名誉人文学博士号の式典が挙行されました。その時、私に「創価大学池田講堂を訪問し、創立者の世界の大学の石を集めて礎石に埋められ、一部を展示される構想にも感銘した。そこで私もヒントを得て作ったものがあります」と笑いながら、「実は自分もアンカラ大学に世界平和公園をつくり、世界の大学に由緒ある樹木を送っていただきたいと諸大学に手紙を送りました」。ところが検疫もあり簡単には集まらなかったが、それでも彼の夢は実ったそうです。池田先生と一緒にアンカラ大学を訪問された時に「君に言っておくけれども、あのあたりが世界平和公園で、池田先生からアイデアをもらったんだよ」と笑いながらおっしゃいました。

同じようなエピソードが、香港中文大学にもありました。香港中文大学は4学院（当時）があ

り、その中の新亜書院というのが一番古く本学で最初の交流協定大学です。新亜書院の林学長が創価大学に見えました。林学長は大学正面の創価大学卒業生の銘板を見て、「創立者の学生を大事にされる姿勢に感動しました」と言われました。そして、「私は池田先生から智恵を頂きました」とも言われたのです。帰国後、香港中文大学4学院のトップを切って、翌年から自分の新亜書院卒業生の銘板を始めたそうです。

次にここでの話のメインになると思うのですが、池田先生は1994年6月1日にイタリア国立ボローニャ大学で名誉学位を受けられ、続けて6月15日に英国グラスゴウ大学で受けられました。

創価大学と先に交流したのはボローニャ大学です。1988年にボローニャ大学は900年祭を迎え、創立者に招待状が届きました。式典には代理が出席しました。

1989年3月に、私と創立者の秘書室の萩本さんと、イギリスのオックスフォード大学とボローニャ大学に出張しました。ボローニャ大学のロベルシ・モナコ総長に5分間挨拶し、そこにいたガンベッタ教授と交流協定の打ち合わせをし、5月に協定を締結しました。

私の役目は、交流協定後に誰が創価大学学生の面倒をみてくれるかを知ることになりました。

海外出張の際に、一緒に行動したのは創立者の鈴木秘書室長ですが、私が大学のことを話し、秘書室長が池田先生のことを相手に伝える役でした。ちょうど1990年くらいからポータブル・ビデオが出てきます。一緒にパナソニックのマックロードを持って動き、相手と歓談しながら、ビデオを見ながら、創立者と創価大学を語るという動きでした。

またボローニャ大学のロベルシ・モナコ総長が日本にやってきて、池田先生をはじめ、当時の文部大臣、慶応大学の塾長、早稲田大学の総長、日本学術会議会長等を表敬訪問しました。行事を終えた後、ロベルシ・モナコ総長を空港で見送る時、「私が今回会った人の印象として、池田先生は、日本の最高の指導者と実感した。もし日本に大統領制があれば大統領になられて不思議ではない」と笑っていました。私が推測するに、総長も多くの世界の名士に会ってきました。多くの国家元首・大学関係者との出会いを通じて、相手方を自分なりに理解し評価されてきました。その体験からの発言だったと思います。その意味では、国際部長として動いた時、来客がどのように創立者をみているか知る機会も多かったと思います。

彼らの来日時の空港での出会い、大学・学園訪問、そして創立者との会見、さらに空港の見送りと来客を観察できたのも事実です。その結果、私がわかったことは、相手は創立者との会見を通じて「自分のためにどれほどの時間を費やされて準備されたか会話から学び感動する」ということでした。それは、池田先生が、自分よりも心が広く、深く、穏やかで優しく、人間性にあふれ、希望的であり、「もう一度会いたい」という気持ちを持たれたからではないでしょうか。それは人間と人間の「真心の交流」であった気がします。

なぜそういう風に思ったかといいますと、池田先生は会われる人に対して、本当に丁寧・誠実に接せられます。たとえばロベルシ・モナコ総長に対しては、ボローニャ大学の校内にはこういう建物がありますね、こういう庭がありますね、こういう木がありますねと準備されて質問されます。フィリピン大学一行にもそうでした。フィリピン大学のアブエバ総長に真心から正しい歴史理解を話され、日本の軍国主義の愚行も「ひとりの民間人として謝ります」と話される。する

と相手の方は、自分に会うためにここまで準備されるということに感動されます。会見の場でも手には小さなメモ紙一枚です。相手は、池田先生が、全部内容を詰め込み、誠意と笑顔で真剣に対話される姿に感銘を受けたと思います。

ところが他の識者との会見の様子を横で見ていると、ポローニャとローマはどれくらいですか、学生数は何百人くらいですかなどと質問される。つまり会見の言葉とか印象が全く残らないんです。ところが創立者は、他の要件で来日されたゲストにも全く同じように誠実に迎えられる、そこは本当に感銘を受けた点でした。

私は、創立者への名誉博士の案件を聞いて訪問した時、常に世界がどういう風に池田先生をみているかということに関心がありました。また私は、式典や対談で創立者の素の部分にたくさん触れます。その時に思ったのは、いつもみんなが感動する。それは先に述べたように、自分よりも心が温かくて、自分よりも心が清らかで、自分よりも心が強くて、人間性にあふれていたなら、もう一度会いたくなりますよね。その気持ちを相手の心にプリントしていられる人間力があられるからだと学びました。それ故に、断言しておきますが、世界の名士との会見は全て先方からの希望を受けてであり、また大学名誉称号にも一切金銭は絡んでいません。それは会見、式典の打合わせ、私が現場に居た証人であるからです。

これも仕事を通じて驚いた点ですが、確かに池田先生のご著作やSGIグラフはありますが、実はその何十倍ものアンチ情報を相手に送る人がいるのです。

これは形而下の問題なのですが、日本人独特の邪智で嫉妬心に支配された人間は正義をつぶそうと死に物狂いでやっている。そこで私たちが必死に正義のために頑張らなくてはいけないと自分に言い聞かせました。本当に幸せなのは、創立者の素の部分に沢山みせていただき、それらが珠玉の思い出となっています。世界の識者も自身の目で対談され、自ら確認された人間像を心にプリントされ、それを持続されていることに感動します。

もちろん私にとって最高の思い出は、1994年6月1日のポローニャ大学、同月15日のグラスゴウ大学訪問と名誉学位式典です。

少し背景を述べますと、グラスゴウ大学から創立者にグラスゴウ大学を訪問できるかどうかのファックスが入りました。

これは、マンロー教授がグラスゴウ大学評議会の議長になり池田先生を推薦されたことが主因ですが、いくつかの要因が挙げられます。まず1980年に2度目のグラスゴウ大学留学から帰国後、指導教授のチェックランド教授夫妻が日本学士院の招待で来日され、創価小学校の運動会で創立者夫妻に会われました。このチェックランド教授が、訪問時のケアークロス総長の友人でした。創立者と会われて帰国後、グラスゴウ大学で同僚・後輩に創価大学や創立者の話をした時、マンロー教授の友人でもある北アイルランドのクィーンズ大学のブラウン教授もそこにいたという不思議なつながりが後でわかります。

また1990年の3月末にフレイザー学長夫妻が三菱重工業の関係で来日し、創価大学訪問を希望された時、創立者と大学で会っていただきました。ちょうど本学に工学部ができる直前でしたか、驚いたことに、会見の席上、創立者はこう言われたのです。「4月から工学部を開設します。貴グ

ラスゴウ大学は世界最初に工学部を作った大学です。ですから貴学を尊敬し本学工学部の図書館をフレイザー図書館と名前をつけます」とおっしゃったのです。びっくりしました。未だかつて個人冠名の部屋はあそこしかありません。

私もその時には、フレイザー学長がまさか後で池田先生に名誉博士号を贈るとは思っていませんでした。ただフレイザー学長夫妻がいたく感動して帰った事は間違いありません。

帰国前の、フレイザー学長から、「マンロー教授は、偉くなるから」と言われました。実はグラスゴウ大学は、総長、学長は理事会が決めるのですが、評議会議長は先生方の投票で決まります。当然、立候補しなければなりません。マンロー教授は、昔自由党から立候補経験もある弁の立つ教授でした。私は知らなかったのですが、フレイザー学長の来日直前にマンロー教授は評議会議長に選ばれていたのです。私がマンロー教授と知り合ったのはグラスゴウ大学に行った時でした。私は英語ができなかったので、下宿先のチェックランド教授夫人から「子どもが生まれ働けないが、英語教師に向いた人がいるから」と言われて、週2回、英語の家庭教師をしてもらったのが、マンロー教授夫人だったのです。

マンロー教授は、冷静な学者で厳しい人でした。奥さんが私との会話で仏法に関心を持ちはじめると、横から出てきて厳しく接しました。正直に言えば好きではありませんでした。ですから、マンロー教授が最初に1991年6月に来日した時、並みの教授でもあり私には創立者に会見をお願いする気もありませんでした。ただ大事にしなければいけないと自分に言いきかせて接しました。聖教新聞社にお願いして、アフリカ特集や関西聖教新聞社で講演会をしていただきました。

実は、先ほど話したようにロンドンのサボイ・ホテルで激励を頂いた時に、創立者から一言言われたのです。「北君、君がイギリスに来たことが、創価大学にとっても、イギリスにとっても歴史に残る日が来る」と。そんなことを言われて私は悩みました。何もできないのに、どうしようかと。そこで、まず日々、真剣に過ごし、目の前の人を大事にすると心に決めていました。

不思議なことに、チェックランド教授から始まり、マンロー教授の先輩のスレーブン教授、グラスゴウ大学のシャープ国際部長、モスバッハ教授、シンハ教授と個々に大学行事の時に創立者に出会う機会があったのです。また、交流が始まってからは長期（10カ月）、短期（3週間）のグラスゴウ大学に英語研修に参加した引率教員や学生が、彼らを教えた先生方や大学スタッフから好感をもって受け入れられ、大学全体に創価大学や創立者への賞讃が高まったことも背景にあげられます。もちろん、その背景で全てのドラマの進展を支えられたスコットランドのリチャード・アケミ・ポーチャス夫妻を始め、SGIメンバーの献身的な熱意がありました。また日英交流年記念行事として、ヒューコタッチ大使が聖教新聞社で会見され、1991年夏、東京富士美術館がスコットランドのエディンバラで日本美術品展示会をされたことも「流れ」を作った一因と思います。

マンロー教授も関西聖教新聞社で講演をしました。観客は200人くらいです。それが終わった時、マンロー教授は私に聞きました。「今聞きに来た人はSGIメンバーか」と。私が「そうです」と話すと、「私は、君が創価学会員だと聞いても信じていなかった。しかし、今日の聴衆には感銘を受けた。創価学会を信用する。創価大学の創立者の池田先生の偉大さも、創価大学の学生さんやメンバーの方々から学んだ」と言ったのです。

私にはわかりませんでしたが、後で思えばマンロー教授は深く心に決めて帰国されました。彼は評議会議長として、フレイザー学長と話をされ、1993年の8月にFAXが入ります。内容は「池田先生は、93年の秋か、94年6月にグラスゴウ大学へ訪問できるかどうか」でした。実はグラスゴウ大学の名誉博士の授与者には「世界の新しい時代を拓く人に」との合意があり、マンロー教授はその上で学科・学部ではなく大学全体の推薦として池田先生を推挙したのです。創立者秘書に打診をすると、94年だったら可能と言われました。それで94年にヨーロッパへ行かれるのであれば、どうせならと思い、ボローニャ大学と交渉したのを覚えています。そしてボローニャ大学も決まります。

スコットランドには、有名な大学が4つあります。1番古いのがセント・アンドリュース大学、次がグラスゴウ大学、3番目がアバディーン大学で、4番目がエディンバラ大学です。実はセント・アンドリュース大学というのは、スイスのジュネーヴ大学をモデルにしています。2番目のグラスゴウ大学はボローニャ大学をモデルにしたのです。3番目のアバディーン大学はパリ大学をモデルにしています。4番目のエディンバラは1560年の宗教改革後なのでモデルがありません。

つまりヨーロッパ大学史の流れで考えれば、ヨーロッパ最古と言われるボローニャ大学の娘がグラスゴウ大学です。これと同じ流れがあります。不思議ですが、創立者は北アイルランドのクィーンズ大学から名誉学位を受けられましたが、クィーンズ大学はグラスゴウ大学の妹なのです。私の研究でも明らかですが、19世紀中頃にケルヴィン卿という人が、親がクィーンズ大学の数学教授で、お兄さんも工学教授でした。ケルヴィン卿はマイナス273度の絶対温度の発見者、地球の年齢測定法、大西洋ケーブルの発案者、また、ナイアガラの滝を見て水力発電を考えた大科学者でした。また我が国を訪問した御雇い外国人の派遣や邦人留学生の受け入れをした立役者だったのです。両大学には多くの交流があったのです。スコットランドと北アイルランドは、民族的にも起源が同じであり、文化も相似しています。

実はクィーンズ大学の名誉学位を決められたケネス・ブラウン教授が打ち合わせにみえた時に先方の希望で私に挨拶する機会がありました。「私が池田先生の話聞いたのはグラスゴウ大学でチェックランド教授からでした」と言われ、びっくりしました。創価大学の1期生が卒業する前の1975年の1月に、グラスゴウ大学のチェックランド教授が国際経営史の富士コンファレンスに来日されました。私の2度目の留学後の1981年に、チェックランド御夫妻が日本学士院の招待で来日され、創価小学校の運動会で、創立者ご夫妻と会見されました。ちょうど娘が創価小1年でした。

私が立ち会っていない場でのことですが、実はチェックランド夫妻が1980年に帰られた後、グラスゴウ大学で経済史講座の先生方、つまりマンロー教授、スレーブ教授たちと訪日の話題と共にサミー（北のニックネーム）の大学と創立者の話をされていたのです。

その10年後にフレイザー学長が創価大学で創立者に会われ、帰国後に新任の国際部長シャープ教授を送り、創価大学との協定を結びました。マンロー教授の先輩のスレーブン教授夫妻が大学講堂での最後の滝山祭にみえ、創立者御夫妻に会いました。同大学の日本研究家のモスバッハ教授が見えました。インド人農業経済学者で国際的に有名な同大学のシンハ教授が日本の上智大学

客員教授になられ、彼の奥様が創価女子短大で数年間、教鞭を執られました。これらの様々な糸があつまり絆となり、創立者宣揚の式典につながっていったと思います。

不思議なのはクィーンズ大学です。インド人で元ネルー大学の教授で、また本学の元デリー大学教授のM・ウィリアムズ博士の友人S・クマール博士が同大学に勤められ、ガンジー・キング・イケダ平和展示会開催を通じ、ブラウン学長(当時)に会われます。そこでブラウン教授の頭の中で、グラスゴウ大学でチェックランド教授から聞いた「偉大な日本の指導者」の話が「つながる」のです。

不思議なのは3つの大学の関係です。ポローニャ大学は母大学、グラスゴウ大学は娘大学、クィーンズ大学はその妹大学に当たることになるのです。これはヨーロッパ大学史の中心の流れの3大学のつながりとなるのです。

そこで、ひとつの結論が見えてきました。確かに私自身、ポローニャ大学とかグラスゴウ大学とか様々な大学の交流で努力しましたが、しかしそうではなくて、本来、池田先生の貢献されてきた形而下の世界での偉大さを実際に可視できる形で残さなければ世間的次元では誰にもわからないこととなります。

それに関連する話ですが、有名な話に、トインビー博士が創立者と対談された時、「貴方は私以上に世界から称賛され、多くの名誉学位を受けられるでしょう」と発言されたことは有名ですが、その時、創立者の名誉学位はゼロでした。最初の名誉学位の通知は、トインビー博士をお見舞いに行かれ(会えなかったが)、ロンドンからパリに戻られ、マルローとの対談をされていた時にモスクワ大学から「欧州の帰路に再度、立ち寄っていただきたい」と連絡があり、同月末に受けられることになりました。トインビー博士には、自分の知識と世界の名士と会見・懇談してきた経験から、この歴史の法則性・方程式を確信できえたからの言葉ではなかったのかと思えるのです。

私は大学間交流の仕事をしなが、僅かな学識と経験でしたが、この法則性の動きを観て判断すれば良かったのです。また不思議なことに、創立者が名誉博士号を受けられる時には、必ず交流協定で相手大学関係者がみえられ感動されて帰って行かれる、またフィリピン大学の事例のように、本学の語学研修、また個人留学生が、その地に増える現象にも気づきました。私には野球の外野手が打者の打音で走り始め、到着点で目を向け捕球できるが、もし目で打球を追えば追いつかない現象に似ていると思えました。目で追うのは、応援団なのです。

トインビー博士自身も創立者と対談され、従前の風変わりな孤高の歴史者から20世紀最高の英国人歴史家として名声を得られました、実はマンロー教授にも類似した現象が見られたのです。私は、彼の奥さんのシルビアさんに英語を学びましたが、彼は冷淡で厳しい性格でした。彼の幼年期は第2次世界大戦があり、時折見せる嫌な態度には、日本人への偏向教育を受けた故ではないかとも思ったくらいです。ですから長い間耐えて友情を支えてきたものの、私の心の中にわだかまりが残っていました。正直に観て学者としては普通とっていました。創立者は、マンロー博士にも他の誰とも同じく、会われて以来誠心誠意の友情を尽くされてきました。

それが創立者を顕彰したあと、彼が学者として出版した最後の作品『英帝国と海事企業』でイギリスを代表する賞を二つも貰われ、一流学者の賞讃を受けます。さらに不思議なのは4年前で

すけれども、本学で社会経済史学会全国大会を開催した時に、関西の某大学の私の友人がマンロー教授を1カ月招待してくれました。その機会に関西学園訪問、青森の奥入瀬の滝訪問、グラスゴウ会の神戸と東京での同窓会、さらに全国大会で報告、創立者との再会と、いくつもの行事を成功させ、会見の翌日に帰国されたのです。全部を知る私には、不思議な歴史のダイナミズムを実感しました。

すごいと思うのは、創立者を顕彰するように世界の300の大学が本当に喜んで名誉博士号を持ってこられた歴史ドラマです。私の知らないところで、一つ一つの顕彰に様々な展開があったと思います。やはり形而下の世界から現象世界に流れ出る何かがあるとしか表現できません。その流れの中で、池田先生に縁を結び、友情を結ばれた方が、現実の世界で証明役を果されたと思えない気がしました。

一つ紹介しますと、トルコの大統領と都内ホテルで会見された時に、昭和天皇が亡くなった大喪で世界各国の大統領、国家元首が、多数みえました。ところがその人たちは会う指導者がいない。そこで駐日外国人大使は、国家元首との会見をSGIに頼んで来られたわけです。創立者は各国大使の希望をくみ、ほとんどの方に会われました。私が会見に立ち会ったのも5、6回あると思います。私たちはトルコ大統領秘書官から挨拶は20分とされました。並ぶ秘書たちも冷たい雰囲気でした。また出てきた大統領も元学者で、私似でずんぐりした方ですが、この方が関西風の「むちゃくちゃおっさん」の風貌でした。奥さんも、近所のスーパーでおみかけするような親しみのあるおばちゃん風の方でした。向こうはひっきりなしにお客が来るので冷たくあしらう雰囲気はみえみえでした。私なんかはどうしようかと悩みましたが、先生は何をされたと思いますか。

創立者は遠くから「ようこそ」と大きな声を出し笑顔で入ってこられ、大統領に抱擁をされました。随行の方は親しすぎる行動にびっくりして目を丸くしました。続けて「大統領、聞きましたよ。大統領と奥様は恋愛結婚なんですってね。大統領と奥様が出会われた時、奥様は高校生だったのですね」と話されました。大統領はびっくりしたが、次の瞬間とろけるような笑顔になりました。また、夫人も御顔が柔らかかになり、明らかに長い間忘れていた楽しい瞬間を思い出されました。二人にとって最も喜びの時を思い出させてあげられました。その瞬間、随行員のみなさんは身を乗り出し、創立者と大統領の会話に惹きつけられました。どうせ外交問題か単なる挨拶と思っていた方々は、仰天したわけです。みんなもじいっと池田先生の話聞いていました。大統領も喜んで話をされる。創立者は15分たった時に言われました。「もう帰ります。お忙しいでしょうから」と。すると大統領は「この15分間は、私にとって訪日してから最大の嬉しい時間です。池田先生に会って、心を洗濯されました。元気になりました。本当にお会いできて光栄でした」と笑顔で言われました。随行メンバーにも笑みがこぼれていました。私にはわずか20分前の雰囲気との違いを実感して信じられない気持ちでした。その後、アンカラ大学名誉学位が決まりトルコの初訪問をされましたが、セリーン総長の決断に「追い風」が吹いたのではないかと思います。

私はパラグアイでもそういうシーンを見ました。インドでもそういうシーンを見ました。創立

者訪問前に、向こうは時間を決めてきます。30分なら30分と。護衛官や秘書がたくさんおり、厳しく言われます。そのときも先生は「いいよ」と言われて入って、たった3分ほど話をされただけで、相手は絶対に帰ってほしくないという気持ちになります。1997年10月にインドのグジュラール首相が先生の手を握っている写真があると思いますが、あの時は大統領執務室を訪問し「大統領はお忙しいから」と矢継ぎ早に話され10分で帰ると言われた時、大統領は「私には先生と懇談するこの機会が貴重なのです。会議の方は都合がつかます。どうか早く帰らないでください」と、先生の手を握り押さえた場面の写真が残っています。

私が国際部長として見たのは素の先生です。つまりどんな人に会っても相手の心にもう一回会いたいと残していく。その自然で誠実な平和・文化交流への行動が、世界中からの国家顕彰や、諸大学からの名誉博士号につながったと思います。